

# 愛して登れ六甲山

上田 浅一 〈神戸愛山協会会長〉

荒尾 親成 〈元南蛮美術館館長〉

大西 雄一 〈六甲山ハイキング〉著者

松岡 寛一 〈画家〉

★昔登り、今も登る六甲の山々

上田 神戸の町を考える時、六甲山の果たしている役割というのには大きなものがありますね。気候や景観はむしろ、市民の健康にも影響を与えている。

それに東西三十kmの山のいたる所で朝飯前の登山ができるというんですから、世界のどこへ行ってもこんな手軽に登れる山というのはないんじゃないですか。神戸の大きさを誇りますね。

大西 本当に六甲山ほど日常の暮らしに密着し溶け込んでいる山は珍しいですね。毎朝山頂で清々しい空気を呼吸でき、日曜には家族でハイキングや飯盒炊さん、友人や会社の仲間と登って恋が芽生えたり。

松岡 六甲の特長はアプローチが短いことですね。ほとんどないと言っていいくらい。それでいて穂高に登るくらいの高さを登るんだから。

大西 アプローチが短くてかなりの深山に入ったような気分になれる、むしろ規模は小さいですが。布引の水源地の構内なんて町からほんとに十分か十五分、それであ

の渓谷に入れる。今でこそ小さくなったが、よく見たら黒部の廊下に似ています。

上田 ああたりの渓谷は深いですからね。芦屋のロックガーデンも、花崗岩の感じなんか燕岳の感じそのままそれが町から数分の所なんですから。

松岡 僕の青春はロックガーデンでした。若い頃朝日新聞に勤めていたんですが、同じ頃藤木久三さんがいらした。僕ら足下にも及びません。山を歩く人というのはああいう歩き方をするものかと、後ろ姿を畏敬の念で眺めたものです。

上田 私は明治三六年初めて六甲山に登りました。毎朝登山のつくばね会を設立したのは大正十一年。朝登山の起こりというのは、神戸の外人が商家の番頭なんかを連れて登り、再度山の茶屋で署名をやり出したのが始まりですね。大正十年前後になると、それをマネた登山会が雨後の筍みたいにたくさんできました。最も多い時には三百近い会があったんですよ。それが再度山ばかりだったもので摩耶山にもひとつ、ということで私が発起人になって作ったのがつくばね会です。



荒尾親成さん

いてみたらかとまた思い直し、尾根から市が原を回って十時頃家へ帰ったんです。それももう思いきり汗をかきましたよ。

上田 年中降っても晴れても毎朝登るという人が三千人はいる。日曜になると何万もの人が登るわけです。私は五一年間ほとんど毎日登っていますが記録が一万八千回を越しました。つくばね会を始めた頃には摩耶山の裏の八十八カ所のあたりにはリスがたくさんいたものですよ。毎朝道のまん中で相撲を取っているんです。

松岡 リスはまだいるみたいですね。この間会ったから。

大西 今でも雫や山鳥には会いますね。

トントントントン落葉の上を歩く足音を聞くことがあります。

荒尾 猿でも昭和十年頃だったか、ボスがつかまってケール川の辺にいましたね。

子供の時分、水晶を取りに登っていちばん恐い思いをしたのはね、山で雨に降られたんです。足下も見えないくらい霧が出て、雨を避ける場所もない。やっとな芝生の陰を見つけてコワゴワ入っていたら、そしたら上からくずれて落ちてきて。恐かったですわ。

それから六甲山が鳴動した話、子どもたちにも非常な恐怖を与えていました。

上田 山のまわりが鳴ったこと、私知ってますよ。明治の三〇年頃でしたか。

荒尾 その時有馬の湯が損氏五〇度くらいに上がったいうんですね。そんな異変があったことを聞いていたから六甲山にうっかり登って迷子になったらエライことだと思っていました。

松岡 今でも遭難するくらいですから、うっかりナメて

今年で五一年になるんですが当初のメンバーはほとんどなくなっていました。当時に三百回以上登ると各会が金メダルを出したので、七つも八つも胸につけて喜んでいる人がいましたね。

荒尾 私は明治四五年頃から登っていますが、その動機というのが健康のためとかいうんやなしに、実は欲で登ったんです。水晶拾いに行っただけですわ。

松岡 ああ水晶谷のあたり、水晶がありましたね。

荒尾 それともうひとつ、小学校五年生の頃でしたが、友だちが朝鮮人参の畑を見つけてきたんです。実際は朝鮮人参じゃなく、ただの葉草畑だったのかもしれないのですが仙人風な人が作っていて、我々子どもには朝鮮人参に違いなかったわけです。

大西 私は今でもよく朝飯前に散歩に出るのですが、この間も朝六時に目が覚め七時頃家を出て、袖谷の山寺尾根をずうっと登り天望台まで行って、それでケーブルで帰ろうと思ったんだがなんやまだシリがムズムズするし天狗道通って帰ろうかと途中まで行って、黒岩尾根を歩

登ると危ないですよ。

### ★山に登るためのものではなかった頃の裏話

荒尾 水晶のある谷と葉草谷へ行く時通ったところの、二冊近くある道をグルームは自費で作ったんですね。その道を外人のカゴが出るのをよく見かけました。藤の寝台みたいなのに棒を通して、それを担ぐんです。

大西 六甲山開発当初の話でもいろいろ話があるんですよ。三国池にグルームが山荘を建て、彼の友人たちを誘って次々山荘を作ったのが六甲山の開けた端緒だといわれていますがね。ところが、当時外人は居住の制限があつて不動産を買うことはできなかったはずなんです。

で、彼らは借地の契約をして土地を手にしたわけですが、それが九九年とか九九〇年というひどく長期の契約だったんです。

上田 永久契約いうものですね。

大西 その頃六甲山というと草っ原で、枯木を拾いに行

くだけの山だったんです。そんなもの金になるわけない。ところがそれを外人がえらい値で契約してくれたものだから大喜びですよ。篠原部落の話ですが。

ところが後年息子の代になって役人たちがなんとなく台帳見ていて、これはオカシイのやないかと思ひ出したんです。契約面積が一畝とか二畝になっているんだ。一畝いうと三〇坪ですよ。外人の家は少なくとも五〇〇坪や一、〇〇〇坪はあるはずや。それで問題になって実地調査してみると、どこも二〇から三〇倍の面積を持っている。エライ大損。契約更新やナンノカンノともめて結局落ちついたようですが。

グルームといえば六甲の開祖ということになりますがこれは開発初期、いわば新日本の黎明期の裏話ですね。

荒尾 グルームって人は愉快な人だったようですね。鳴尾の競馬場で、馬に「ベッピンさん」という名前つけて走らせていたそうですね。

大西 以前藤木久三さんと対談した時に伺ったことなんです。ハイキングというものを神戸の人たちに教えたのもグルームたちだったということですね。それまで日本人は目的もないまま山を歩くことはやらなかったんです。宗教的な登山以外。



上田 浅一 さん

藤木さんは近代登山術の開祖といえる人ですよ。彼が昔、姫路の山へ登った時その道中の話なんですが、藤木さんは大きなリュックを背負って歩いていたので。途中の学校で、子供たちが遊んでいたもんだから立止まってしばらく見ていた。その時は子どもたちがたくさんいたんだけど、しばらく行くうち人影がまるでなくなりました。おかしいなと思って、泊まった宿の部屋で話をしているとフスマを開けてのぞく奴がいる。いよいよヘンだということで聞いて



大西 雄一さん

っかり姿が変わり、昔カゴが行ったなんてことがまるで想像できない道になってしまいましたね。これも六甲山系の体質というものの現われだと思わんですが。松岡 しかし、袖谷はまともや変わりましたね。コンクリートの階段がついている。あれにはあきれてしまった。

上田 昭和一三年の大水害で、どこの谷もみんななくなってしまった。それまではトウエンティ・クロスにもずいぶん飛び石があったものです。苔むした飛び石が二三もあって、アッチへ飛びコッチへ飛びして谷上へ、抜けた道だったんです。滝谷越えといつて、布引から上谷上へ出るいちばんの近道だったんです。

みると、実は子取りが大きな袋を持ってやってきたと、村中が警戒していたというわけなんです。袋担いで山に入ってくるのは子取りか山師しかないって。

★二十三の飛び石を伝って滝谷越えした頃

上田 グルームが六甲の開祖やいいますけど、ほんとのところはそうではないといわれていますね。誰だったか確かなことはわからないが、何でも谷上の一党だったという事です。六甲に氷の池をこしらえて、自然の湧き水だけの氷を作って下まで運んでいたとか。その道がアイスロードやいうことですが、今のあの道からはとても想像できないですね。

荒尾 六甲の寒氷いうたら昔宮中に奉納したものです。オガクズなんかでくるんで、夏まで溶けないようにしておくんですね。

大西 グルームらがカゴで通ったという道、おもに袖谷を通ったんですが、今の袖谷は水害に何度も会って、す

るのにいいコースとして、私なら天狗塚から長峰に出る道を推薦しますね。アプローチが良く乗物を使わないでしかも自然の状態がかなり保たれています。

松岡 あそこはまだ荒らされていませんね。

大西 すばらしい眺望ですよ。ちょっと急な箇所もありますが。

荒尾 登り口の所に「山の神」という祠があるんですね。

松岡 僕は年寄りのくせして沢歩きが好きなんです。表六甲では西山谷あたり、裏六甲では白石谷ですね。ハイキングコースとはいえないかもしれないが。

上田 私の好きなコースは、布引から溪谷を通り天狗道を登って摩耶山に出る、それから青谷に降りて行者茶屋を通るコース。近いしほんとに自然のままです。七曲りのあたりがちょっとエライですが。

荒尾 私は足が弱くから機械で登ることにしています。六甲山に登ってしまつて、それから摩耶山に歩くとか、ロープウェイで奥摩耶まで行って布引へ降りるとか。

松岡 あんまりいい道ばかりじゃって、人がワッと押

し寄せて来るようになったらセツナイですからね。

荒尾 歴史的におもしろいのは徳川道でしょうね。あの道は開国時に外人たちとトラブルが生じることを防ぐために、大名たちの通る道として作ったものです。慶応二、三年のことですが。結局完成した後、大名は使わずじまいに終わったようです。

大西 当時の金額で何万両とかで工事を請負ったんですが、大名は一度も通らなかつた。翌年の慶応四年に起こった事件の犯人が逃げ入ったということを知っている。

松岡 皮肉な話ですね。

大西 子供の時分、昔の話をよくしてくれたお爺さんがいた。お爺さんは神戸事件を覚えていて、まだその時は子どもだったそうだが、外人の兵隊がたくさん上がってきて、布引のあたりから北へ攻めていったらしいね。

おもしろいと思ったのは天満の騒動を起こした有名な大塩平八郎、これは天保七年の乱だけど、最初は甲山でやろうとしていたらしいんだね。それで六甲や摩耶を下見に来ている。失敗したら六甲の山中に逃げ込もうと考

えていたんだ。

★自然保護もまかりまちがうと……

上田 最近の六甲の自然の壊され様といったらひどいものです。谷筋にみな堰堤をこしらえるものだから、自然がつぶされてしまってます。水害を防ぐには堰堤を作るしかないのですが、私たちがそのことを提唱してきていたわけなんですが、それにしても最近のやり方は行過ぎだ。堰堤作るたびに山道がメチャメチャにされている。雨が降るとドロドロ道になってしまうので、有名なハイキングコースだった魚屋道でも、一度来た人は懲りてしまう。

大西 堰堤は昔ながらの自然の形をくずしてしまおうという欠点はあっても、治山治水、市民を守るためにはどうしたってやらなきゃならないことなんだ。ただもう少し気をつけて進めてほしいということだろう。まるで考えのない、でたらめなやり方みたいだ。

最近流行の自然歩道、あれは腹に据え

かねます。私は神戸市の太陽と緑の道の専門委員だったので、他の地方を見て回ったんです。できていたのは自然歩道とはとんでもない、まるで不自然歩道だ。

都会人が自然を楽しむためのものだといいのに、わざわざ金をかけて自然を壊している。その点神戸の太陽と緑の道は極力自然のままを残して、危険がないよう手を加えるのは最少限に止めた。

ところが役所の仕事というのはおかしなものだね。自然歩道のための予算があるから道を作らなければいかんということで、せっかくの山道を台なしにしかない。自然歩道の、市民を自然に親しませるという主旨、それは全く結構なこと



松岡寛一さん

なんだ。それがだね、その最初のテーマが忘れられてしまつて、いつのまにか予算を消化するためだけの仕事に変わつてしまふ。本末転倒だよ。どうもこの話をし出すと興奮してしまつて。(笑)

松岡 我々が最も愛する徳川道、袖谷、こういつた道がとんでもない姿にされてしまつた。袖谷なんて、峠へ上る滝のところの坂が全部階段ですよ。あれはひどいものだ。

大西 町中の道と違い、山では舗装された道というのは却つて危険なんですよね。山の地肌を楽しまつためにこそ山に登るのに、その道が舗装してあつたり、レンガで道の両側が縁取りしてあつたり。

荒尾 六甲山を歩いているというのに、銀座や新聞地を歩いているのと変わらなくなつてしまふ。車はブルーブルーのさいし、大変な雑踏だ。

松岡 六甲山上はホコリ・高き道ですよ。今は日本中がそういう傾向にあります。

大西 そうですね。この間、誘われて鉢伏へスケッチに行つたんです。荒れているというのを聞いていたんで気がすすまなかつたんだけれど、行つてみるとやつぱり。あの懐しい鉢伏がヘンなはち巻きをしてしまつていた。いずれ氷ノ山もやられるんでしようよ。

★山への関心が増え山女が増えゴミの山が増え

上田 しかしこの頃山への関心がずいぶん増えたようですね。

松岡 イヤどなたも精出して山に登つて、精出して山を汚してくれてはりますわ。

大西 山に登ること、これはおおいに奨励したいですが少しは山を汚さないように気をつけてほしいとお願いしたいですよ。なにしろジュースの空きカン、弁当ガラが食べたまま放りっぱなし、もうちよつとキチンとやれないものでしょうか。

上田 市民山の会はそのことはやかましくいつているものですから、毎月の例会に三百人登りますが、みんな持つて帰つていますよ。

大西 エエ、指導者がいてきちんといつてくれているところは違ふんでしようが、一般にはまるでなつてないですね。とにかく弁当でも食べようかなと思ふ場所、休むのいい場所なんかはもうゴミの山。なんとかしてもらわないと……。

松岡 そうかと思うと、ナントカ山岳会といつた人たちが掃除してくれたという美談がたまに聞かれるし。

大西 業者も責任持つて容器の回収を考えてほしいものだ。まさに公害を売つてるようなものだから。

上田 ウツクシイナアつて緑を眺めていて、そのすぐそばに空きカンがころがっているんだから、全く興奮めもいところ。

大西 持つて来たものだけ持つて帰る。なにも難しいことじゃないのに。

荒尾 全くだ。それはそうと、この頃山で女の人が目立つて多くなつたと感じませんか。

松岡 山男より山女の方が多くなつたんじゃないですか。とくに若い二〇代、三〇代といつた世代で女の子が多いようですね。山で出会うのが、ガチツと背に荷を担いでリッパだなど思つていて、すれ違ふとそれが女の子だつたりして。髪を長くしたヒョロの男の子は山に来ませんものね。

上田 山の会でも女の子が増えたようです。若い男の子といふのはあまりやつて来ない。

松岡 今日の座談会は、若い山女が参加していなかつたのが残念でしたな。

荒尾 ほんとに残念だつた。(笑)



北 欧 の 銘 菓

お中元には…



\* 御贈答最適品 \*

バウムクーヘン

クッキー

アーモンドフルーツ

ユーコンV

クリームシモン

マドレーヌ

\* 各種詰合せも取揃えております。 \*

**ユーハイム・コンフェクト**

本社・工場・熊内店/神戸市灘区熊内町1の35 (市立美術館東隣) TEL 221-1164  
三宮センター街本店/神戸市三宮センター街(洋菓子・喫茶・レストラン) TEL 331-2421  
さんちか店/神戸市三宮地下スイツタウン TEL 391-3558

BY DORMEUIL



O-SHIBATA



柴田音吉洋服店

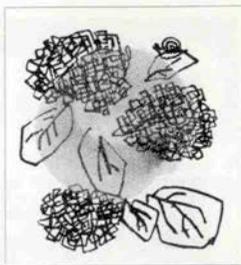
神戸・元町4丁目南 神戸 341-0693  
大阪・高麗橋2丁目 大阪 231-2106

## ★六甲山を歩く

## 詩情をさそう六甲越え

コース 1

阪急芦屋川駅——高座滝——ロックガーデン——風吹岩——雨ガ峠  
 本庄橋——最高峰——魚屋道（住吉道）——有馬



梅雨の前触れか雨模様の日が多い五月の終り。道案内のK君に電話。「芦屋から六甲・有馬へのコースは5時間位ですね。でも遅くても9時には出発ですね。」いとも簡単に9時といってくるが、あれやこれや頭の中で計算して10時に約束、暫らくコースや所持品のアドバイスを受けてるうちに、どういう訳か30分延長。かくしてせっかくの風薫る季節の週日の登山は、あまりさわやかならぬ陽の高い時刻の出発。この日は空の綺麗な五月晴れ。子供の遠足よろしく、おにぎり、おやつ、お茶にジュースとあわてふためいてまたまた15分も遅刻。約束の阪急芦屋川を出発した正確な時刻は、5月30日、午前10時47分。芦屋川にそって坂道の住宅街を歩いていくうちにもう背中のリュックが重くなる。見ればK君は地図を片手に涼しげな顔。私の情ない有様を見て重いリュックは自然移行。最初からこれではとK君の心配するような顔が印象的。

いつの間にかアスファルトから土の道へ。「左流道」の石標に導かれて高座滝につく。汗の肌に水しぶきがひ



水しぶきが涼しい高座滝



風吹岩からの眺望

んやりと気持ちいい。一息入れた後、滝の横の岩肌を暫らく登ると左手にロックガーデンの切りたつた岩壁が目に入る。日本の有名なアルピニスト達の初歩の訓練の場としてつとに名高いこの芦屋ロックガーデンでは、今日もどこの山岳部の連中がザイルを頼りに数百メートルの絶壁に挑戦していた。山男を目ざす人達にはいつかはやってみたいロッククライミングなのだろうか。そんな事を考えながら結構きつい登りに挑んでるうちに風吹岩に着く。岡本の保久良神社・金鳥山からの道との合流点、ここからの眺望は素晴らしい一言。登山には少々暑すぎる快晴の日の眺めは、眼下のロックガーデンの無数の岩峰の向うに白い街が広がり、その向う海と空との境界が定まらぬさまは、いつ迄眺めてもあきない風景だった。

尾根づたいに松林の中を少し降ると突然池が目に入



木蔭を映す横池

る。山の中の池というのは多少神秘でもあり、又何故か不気味な感もあるが横池は緑の水をたたえた綺麗な池である。ここで休む人が多いのだろう、その人達の捨てた空罐やゴミがうす高く積っており、殆んど人と行き交わない週日の登山だけにこの光景の無惨さが一層身に滲みて感じられる。

横池をあとに松林を進んでいくとゴルフ場の芝生が見えてくる。週末でなくても白球を追う暇な人種も多いとみえて、忙がしそうなキャディ嬢の白い帽子が印象的。ゴルフ場と登山道のクロスしている処からが東おたふく山の登り。東おたふく山は六甲山塊にわずかに残る秩父古生層の珪質頁岩からなる山で別名シノキ山。この登山前の座談会で、東おたふく山から雨ガ峠への辺りは信州の高原のような素晴らしい処だとは聞いていたが、全くそのとおりで山全体が草原状の夢の様な処であった。草が風にそよそよとそよぐさまに思わず足を止め、暫らく抜けるような青空のもとで寝ころんでいたい思いであった。

花原の峰に未練を残しながら、雨ガ峠から住吉川の川原にくだる。やっとここでK君より昼食時のサイン。私は道中、レモンをかじったり、缶をしゃぶったりでさほどの空腹感もなかったが、やはりおにぎりは最高においしい。飲み水でもある住吉川の清流に手をひたしながら小休止。元気をとりもどしたところで再び出発。石ころの川原は飯盒炊さん跡の黒くすすけた石が多い。川原の

つきあたり、堰堤の手前が本庄橋。昔の往還路の名残りの三本の長い石の橋である。ここから七曲り道への登り口はK君のガイドがなければとてもわからない。初めての人は地図をしっかりと見て迷わないように気をつける事。

K君の「30分でもう頂上ですよ」の言葉に喜々としていた私だが、なんとここが最大の難所。七曲りの急坂を喋る余裕もなくひたすら登って、やっと一軒茶屋にたどり着いた時の嬉しかったこと筆舌に尽しがたし。

この茶店のインコとしばらくお喋りを交したあと、今度はひたすら下るのみの魚屋道を、六甲最高峰の道標を左手に見やりながら有馬に向かう。魚屋道は昔から瀬戸内で採れた魚介類を当時の最大の遊興の地、湯の町有馬へ運ぶ主要路で、最短距離の六甲越えの道として利用された。木立ちの間から見える丹波の山々と裏六甲の展望は明かるい表六甲とはまた違った落ち着いた味わいがある。これ迄のパラエティに富んだ登り道と異って、やや整ったハイキング道ともいへべき魚屋道の降りは、楽ではあるがまた単調でもあった。

約一時間、ひたすら下ってキャラバンシューズが足に重く感じる頃最終地有馬へ到着。午後4時20分。しばし無言で休憩。炭酸水を水筒に汲んで今日の六甲制覇は終宴。



魚屋道道標と最高峰

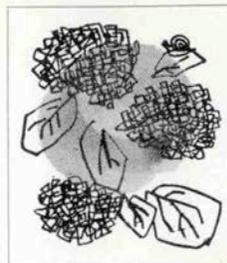
★六甲山を歩く

# 有馬と神戸の交易所

## 本庄橋

コース 2

白鶴美術館——住吉谷——五助堰堤——本庄橋——七曲り  
 ——軒茶屋——鳥居茶屋——船坂谷——宝塚



このコースは、住吉谷を登り、いったん六甲最高峰へ出て、船坂谷を下りることになる。

阪急御影駅から歩き始め、白鶴美術館を経て、しばらく、住吉川の流れに沿って舗装道路を歩いて行くと、山道への入口にさしかかる。これを住吉道といい、白鶴美術館から住吉川をさかのぼって、六甲山最高峰にいたる約八キロのこの道は、その昔、有馬への六甲越えの道であり、かつては、商人や有馬温泉への湯治客が歩いて、あるいは、駕籠にのって往来したということである。

住吉道の入口には、昭和十三年におこった水災の(記念)碑が建っている。歩きながら、ふと見上げると、豪華なマンションが山の上に建っている。地盤が崩れたらどうなるのかなあなんて野暮な心配をしたり。何でも、こちら辺に昔の水車小屋があるとのことなのだが、ついに見つからず終いであった。七輻場、八輻場の家屋を右手にみながら、細い山道へと入って行く。しばしの歩行のあと、やがて、五助堰堤に出る。

この堰堤は、昭和四十二年七月の出水の際には、上流から流れて出た土砂十二万立方メートルを貯めて、下流への被害を未然に防いだ実績がある。二、三日前に降った雨のせいかな、堰堤には深い色の水が満々とたええられていて、いかにも涼し気であった。

しかし、この付近は迷いやすいことで有名(いや、悪名かな)でもある。というのは、話によると、登りにこの堰堤を越すには左側からいったん五助谷におりて、右の住吉川の本流を歩かなければならないのであるが、そのまま五助谷を住吉道と間違えて登ってしまうことがあ

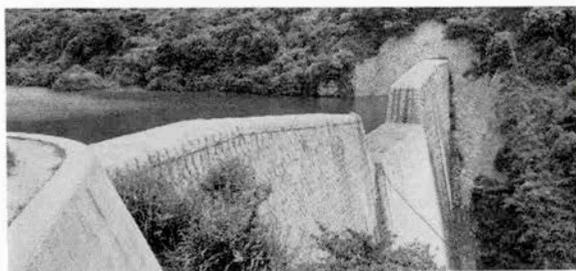
るからだということである。要注意!

五助堰堤を越えてからは、住吉谷の渓流に沿って、あるいは山道を、あるいは川原を石伝いに歩いて行く。途中、川のなかの大きな石の上に白ペンキで、水晶谷と本庄橋のそれぞれの方向をしるした標示があったりする。石が移動しないといいのだが。こちら辺は、水もきれいに澄んでいるし、手ごろな場所も多いので、休日には飯

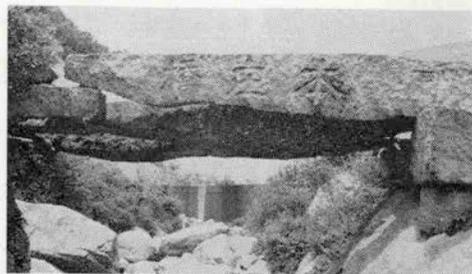
ごう炊さんをやるひとも多いのだらう、跡があっちこっちにあった。が、缶入りジュースの空き缶の山を見るにつれ、山を訪れるひとのマンナーの重要さを痛感する。本庄橋に近づくとつれ、

それまで澄んでいた川の水が次第に濁り始めてきた。変だなあと思いつながり歩いて行くと、成程、濁るはずだ。工事中でダンプカーが止めてある。やがて本庄橋に着く。ここで昼食とする。

その昔、この本庄橋付近の川原で、有馬側から来た人たちと、神戸側から来た人たちとの間で交易が行なわれたという話が残っている。橋の上には本庄堰



水を満々とたえた五助堰堤



昔、神戸・有馬両側からの交易のあった本庄橋

堤がそびえ、カラスが一羽、カアと人を馬鹿にしたような一声を残して飛び立った。

ここから、このコース最大の「難関」である七曲りへ入って行く。文字通り、ジグザグの急坂であり、かなり苦しい。こういう坂は休憩をとらずに一気に登るものであるが、途中、ふと立ちどまって汗をぬぐいながら、

素晴らしい眺望にホッとしたりする。ところが、おおむね七曲りの終りに来たと思われるところで、突然、道はセメントにおおわれてしまう。それも文字通り、土の道にセメントを流しただけという不格好な状態であり、何故こんなことをするのかと考え込まざるを得ない。登山者は何もセメント道を歩くために山に登るのじゃあるまいし。

七曲りを登り切ると一軒茶屋に出る。こでしばしば休憩。見上げると六甲最高峰の米軍パラボランテナがニョッキリ。一軒茶屋からドライブウェイを歩いて行くと、左側に魚屋道が続くが、そのままドライブウェイを歩いて、石宝殿への入口に着く。その向かい側の鳥居茶屋から船坂谷を下ることになる。

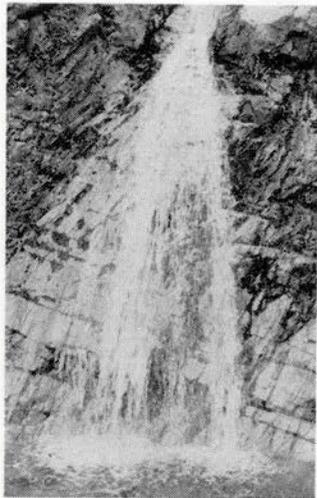
船坂谷は石宝殿を源流とし、裏六甲の谷のなかでは一番長く大きく、変化に富んだ風格のある渓谷であるといわれている。この渓谷の岩はどれもこれも風化していて、いずれも奇妙な趣きを見せている。頭の上に遥かにそびえる岩が、いつ崩れてくるのかと思うと余りいい気持ちではないが、それ程もろくもないだろう。途中この谷の真下を通る芦有道路のトンネルの通風塔が建って

いて、近づくくと、ゴーと風がなっているような音がする。やがて、鳥居茶屋から船坂橋へ到る。丁度、中間あたりに位置する、この谷唯一の滝である川上の滝に出る。雄大とは到底いいがたいけれど、歩きにくい谷合いの道を下ってきた者にとっては、何とすがすがしく感じられる。このあたりを流れる川の水はとてもきれいに澄んでいて、その上、とても冷たく、思わず飲みたくなる。途中、伏流になっているので余計澄んでいるのだろう。

船坂谷の終わるところに船坂橋がある。この船坂というところは、寒天の製造で知られているところであり、現在も、以前のように盛んではないが、製造されているということである。宝塚行のバスの待ち時間を利用して、付近のとある寺に立ち寄ってみると、昔、寒天の製造に使用されていた大釜が二つ、雨桶受けに使われている。成程、考えたナと感心する。

船坂橋からバスで宝塚までは十数分。途中、蓬莱峽の素晴らしい眺めが車窓に見え、しばし、みとれる。

このコースは、途中の七曲り以外にはこれという難所もなく一般向きであろう。今回のコースには入れなかったが、石宝殿は六甲山の守り神とされているそうである。飯ごう炊さんにも最適のコースだといえるであろう。



スガスガしい川上の滝

★六甲山を歩く

# 幽谷の気分が満喫できる西山谷

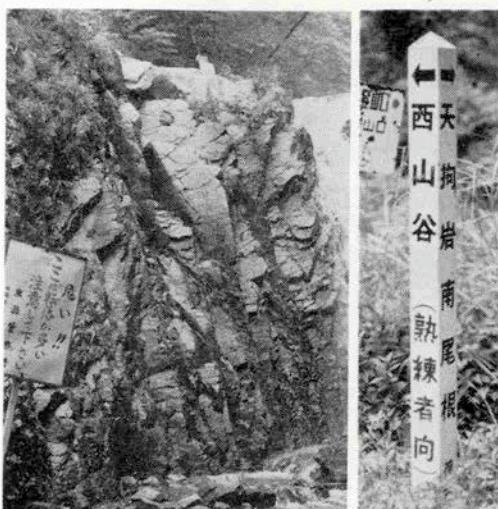
コース 3

阪急御影駅——西谷橋——寒天橋——千丈谷ダム——西山谷——天狗橋——十国展望台——極楽茶屋——紅葉谷——有馬



阪急御影駅に桑原一夫さん(県立芦屋高校山岳部OB)と待合せて、西谷橋までタクシーで入る。西谷橋、庭池に花が乱れ咲いていた甲南農園と歩いていくと、三十分程して寒天橋につく。写真にあるように、寒天橋の手前右の道は天狗岩南尾根に入り、「西山谷(熟練者向)」の道標にいささか緊張する。取材のためとはいえ、なぜもう少しやさしいコースを選んでくれなかったのかとふと思う。

橋を渡って右折し、正面のダムの左を登ると千丈谷ダムで、西山谷の谷歩きはこの川原から始まる。「西山谷は、大小いくつもの滝の連続で幽すいな景観が楽しめる」とガイドブックにあったが、二番目か三番目の滝の



熟練者向きとはいえ岩登りを楽しんで下さい

そばで「危い！こは転落が多い。注意して下さい」

の立札をみて、このページ上段左側の写真にみるような岩場を登らなければならないと知った時、ビビらなかつたといえはウツになる。しかし、思ったより足場があり、一步一步、岩に足を置いて登っていけばなんでもなかった。もちろん、西山谷の経験者である桑原さんのリードがあればこそではあるが。桑原さんの話によれば、岩登りのコツは、両手でしっかり岩をつかんで、足場を確かめながら登っていくのが大切であるということだった。

岩登りの初歩的な技術を教えてもらいながら、また溪流の涼しげな音をききながら、谷歩きをしばらく楽しんでいたのであるが、よくみてみると雑草が青々と繁茂している。人間の背の高さ程に生長しているものもある。日当りの悪い谷の雑草としては珍しいなと思つてたずねると、桑原さんは「上流に山荘やホテルがあるから、栄養



人間の背丈ほどある雑草(立っているのは桑原さん)

分を含んだ下水のせいじゃないかな」と答えた。そうかもしれない。西山谷では、「飲料水に不適」と書かれた立札が、よく目につく。それほど水の汚染化が進んでいるのである。そのせいか、サイダーやビールの空缶もよく落ちていた。飲ん



西山谷は幽谷と滝が調和して、変化のあるコースが楽しめる

だ人が気をつけてそれぞれに持ち帰り、ゴミ箱に捨てればよいのだが。山といえば、きれいな水、きれいな空気と想像していたのが、そうでなくなる日がくるかもしれない。一人一人が気をつけなければ、山を守ることはできないし、自然を失った後で気がついて遅いのだから。

西山谷には十四の滝がある。高さ三メートルから二十メートルまでの滝で、第七番目のふるさとの滝と呼ばれているものがこの谷の最大の滝で、幽谷の気分が満喫できる。この日は、昨日の雨で水量も多く、圧巻であった。その他に名がつけられているのは、第十三番目の静かの滝であろう。その名のように、細い水流が一筋（この日は水量が多く二筋の滝となっていた）女性的なやさしさのある滝である。

この西山谷には枝谷が入って迷いやすいところもある

が、そのつど道標があるし、沢の大きい方を選んでいけば迷いにくい。しかし、第九番目の滝のあたりは、同じような大きさの沢が二つあり迷いやすいが、岩に黄色のペンキで「左、天狗橋」と書かれてあり、道標に従って進んで行くといよい。このペンキも薄くなっており、書き替えをお願いしたいものである。

熟練者向と書かれている西山谷の谷歩きであるが、巻き道もあり、西谷橋から天狗橋までの距離も長くない、経験者のリーダーさえいれば、幽谷の気分が十二分に満喫できる谷なので、ぜひおすすめしたいと思う。

取材写真を取りながらのゆっくりしたペースでの谷歩きで、西谷橋を午前十時に出発、途中で昼食をとって、天狗橋についたのは午後二時すぎだった。天狗橋からはドライブウエイを歩いて回る十国展望台を通り、展望台の右から尾根筋を無線中継のかたわらを通り、十分ほどで極楽茶屋に出る。

極楽茶屋の右側にある紅葉谷への道標にそって、谷の流れをみながら、階段状に下っていくと、やがて雑木林の落葉をふみながらの歩きやすい道になり、有馬に向かってどんどん下っていかばいい。静かな木立のなかのこの道は特に秋のモミジがよいのだが、新緑も美しい。茶屋から有馬まで二時間もあればよいので、家族連れのハイキングとして、楽しめるコースである。



家族向のハイキングコースとして有名な紅葉谷の入口

★六甲山を歩く

ハブ・ア・ナイスデー!

コース 4

ケーブル山上駅——ゴルフ場——高山植物園——カンツリーハウス  
——シラケ谷——逢山峽——有馬口



5月30日、天気快晴。絶好の山登り日和。(登山と言わないところが奥ゆかしい)

案内をしてくれるM君と、見るからに淑やかなT嬢、関節炎を患う私の三人で天下の険、六甲山へ出発！と言っても、このコースは一般向き、そう私たち向きのいわゆるハイキングコースなのです。

阪急六甲駅よりバスでケーブル土橋駅へ。平日なのにうれしそうにリュックなどしょってゐる私たち(大げな格好をしているのは私だけ) 神大生で満員のバスの中にあつて、ちよびり恥ずかしいが「遊びではない、仕事なのだ。」

土橋駅を午前十時四十分発のケーブルで山上駅へ。案内の定、ガラガラの中、乗客は私たちの他、一組のカップルだけなので、ゆつくりと眼下に広がる景色を楽しむことができ、さながら専用車のように。

「あそこにポートアイランドが見えまする。」  
「あっそう」

所要時間約10分で山上駅に到着。やっぱり歩いて登るより速いわあ。山上駅から有馬まで日本一長いロープウェイがあるが、私たちが文明の利器を使用するのはこれまで、これからは歩け・歩けなのだ。舗装道路を歩いていると、上から下りてくる女のコのグループ、前日は六甲山で泊まったのか皆爽やかな顔をしている。ここは空気がきれいだし眺めもいいし、きつと楽しかったろう。

舗装道路から小道に入り一路ゴルフ場へ。あじさいが咲いているかしらと思っていたが、私たちの通った道には、残念ながら全然咲いていなかった。明治36年に開か

れた日本最初のゴルフ場で冬はスキー場に早がわりというゴルフ場のまん中を通り、山陽自然歩道を歩く。ゆるやかな起伏のグリーンの向こうに小さく前述のロープウェイが見える。舗装道路に再会して暫く行くと、高山植物園に着く。約千四百種の高山植物があり、あの有名なエーデルワイスも咲いていた。久しぶりにアメンボウも見たし……こころで記念写真。山上駅から約60分かかった。

高山植物園からカンツリーハウスまで、テクテク歩いて待望のお弁当は、遠足の子供たちで賑わう中。

「先生、靴がドロにはまってなくなつてしまつた……」  
「ユミちゃん、こつちよ……」

という声を聞きながら食べる。家族ぐるみでレジャーを楽しむには、もつてこいの所と感じた。芝生に寝ころんで休憩すること約一時間半。よいしよと立ちあがりいざ有馬まで。これらが問題なのだ。

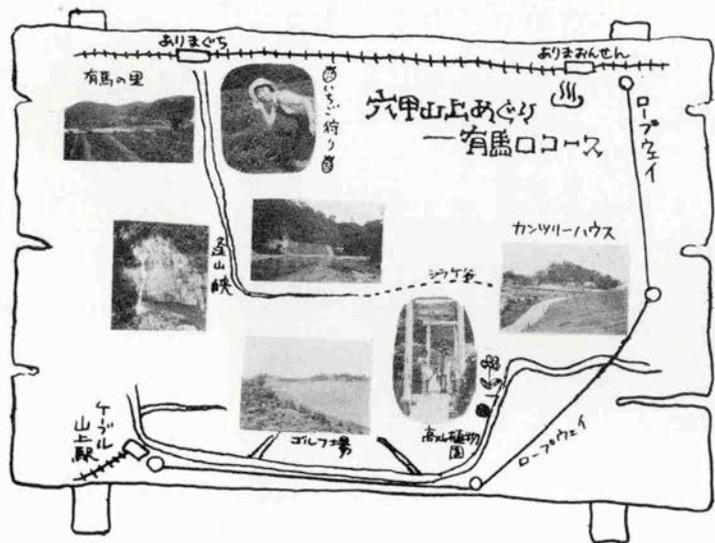
仙人窟——シラケ谷——逢山峽——有馬口——有馬口と言ふコースが私たちの



遠足の子供たちで賑わうカンツリーハウス

消化すべきコースなのに地図どおり行っても仙人窟へ降りる道がないのだ。磁石と地図と六つの目で見たが仙人窟へ下りる道が見つからず、小一時間ウロウロ。途中「やや、パンダがこんなところに……」と思わせる大きな白黒の犬（某山荘の番犬と判明）に吠えられ、結局、直接シラケ谷へ下りることにした。

それにしてもシラケ谷の話、このコースは一番ラク、目をつぶっていても歩けると言われてやって来たのだが、私にしては大問題、実にスリル満点ではないか！ M君が私たちのために安全そうな場所を探してくれたのと、周りに木が繁っていたのでつかまる所があり何とか無事に下りたものの、私たちと同程度の初心者の方は、十分気をつけて下りてほしい。まあ、シーズンになれば、こう



してだんだんに踏み固められ結構、道がつくのだとは思いますが……念のため。

わがコース唯一の道なき道シラケ谷を征服、だんだん傾斜も楽になり始めると、聞こえてきました清流のせせらぎの音が。やっぱり山はい

いなあ、でもよく歩いたこと……。歩くことはいいことなんですよ。一日最低一万歩は歩いた方がいいんです、と『美しい足をつくる本』に書いてありました。冗談じゃなく美容と健康に本当にいいんです。でも疲れたら休もうよという訳で、溪流のをばまで下りて行って一休み。

元氣回復、またテクテク歩き始める。逢山峡の手前でカラスの群を発見。一瞬ヒチコックの「鳥」を思わせギョッ！ 見て見ぬふりをして通りすぎる。逢山峡はハイキングコースとして有名で、川原での飯ごう炊さんやキャンプ場として親しまれている所。兵庫県の高校生の山岳部の大会は、毎年ここで行なわれている。滝の流れる風景を見ながら歩き続け逢山峡とサヨナラ。もう終点有馬口は目前。田植えも終わったのどかな里を摘みたての苺を食べながら歩く。（途中で苺摘みをしたのだ）オオハブ・ア・ナイス、デー！

帰りは神鉄を利用し電車で帰るもよし、有馬温泉まで行き、バス、車、ロープウェイで帰るもよし。

ただし、これだけ歩くと、日頃運動不足気味の方は、以後三〜四日、体中（特に足腰）が痛くて階段の昇降等に悲鳴をあげなくてはならない。成功を祈る。



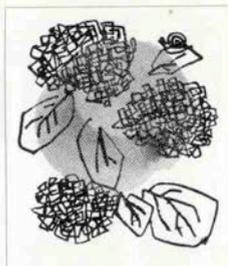
そろそろ、せせらぎの音が聞こえてくる

★六甲山を歩く

# 駕籠で登った袖谷道

コース 5

護国神社——長峰墓地——袖谷道（カスケードバレイ）——袖谷峠  
——シエール道——ドライブウェイ——炭ケ谷——花山



明治の末から昭和の初めにかけて、いわゆる六甲山開  
発期の頃、神戸市内からの六甲登山はもっぱら袖谷（そ  
まだに）道が利用された。

明治の終りから大正初期には山上に住む外国人は六〇  
名余りで、その数は年々増えていったが、彼らは山上の  
別荘へ行くのにみな当時の唯一の山の交通機関であるカ  
ゴをよく利用した。そのころ袖谷口の五毛（ごもう）天  
神に帳場があって繁盛していたそうだが、カゴの料金は  
袖谷から袖谷峠を越えてはるか西六甲の三国池までが50  
銭だった。土、日曜日など多いときには三往復くらいし  
たという。こんな「カゴ登山」が昭和四年にドライブウ  
エイができてバスが走り出すまで続いた。わずかに四〇余  
年前までは今では想像もできないような状態だったので  
ある。そんな当時の頃を思い起しながら、彼らがカゴで  
登った袖谷道をたどってみることにした。

六月二日（土）午前十一時。護国神社西側のアスファ  
ルトの道を15分ほど登る（傾斜20度でかなり急な道）と

右手にカナディ

アン・アカデミ

ーがみえてく

る。この学校の

裏手に長峰墓地

があり、墓地の

茶屋の横手の道

を登ると大きな

ダムの上部に

出  
る。ここから

つづくの谷筋をたどるのが袖谷道だ。

この谷はかつて外国人たちが「カスケード・バレイ」  
と呼んでいたように、道の左右にきれいな落着いた溪流  
が展開し、ハイカーの目を楽しませてくれる。

当時カゴをかついで登ったにしては道は狭いし、かな  
り急な所もあるが、これは昭和13年の阪神大水害で谷筋  
が著しく荒らされて岩床が露出したり、またダムの工事  
などのためかなり人工的に道が変えられたためでもある  
う。

新緑の頃で、土曜日とあって、一人で、あるいはグル  
ープで若いハイカーたちが次々と登ってくる。溪流で飯  
盒炊さんをしている家族もある。テントも見える。ダム  
の上では外人の青年男女が四人裸で寝そべっている。六  
甲登山ではポピュラーなコースなのでハイカーが多い。  
ゆっくり歩いて一時間ほどで寒谷滝に着く。ここから  
先が袖谷峠だ。ふと見上げると溪流の右手に道標があり  
ここから先は「自然歩道」と明示してあり、ずっと上の

## 袖谷（カスケードバレイ）

近代六甲開発の足がかりとなった谷です。  
明治の末、神戸に住む外国人は五毛天神から  
この谷を通って六甲山に登ったので、途中に  
滝が降々にあるのでカスケードバレイと呼ん  
でいました。

神戸市

袖谷道の登山口にある立看板



溪流の上を歩いて登る



## ★六甲山を歩く

## ◇氷の道◇と◇聖なる道◇

コース 6

阪急六甲——ケーブル土橋駅——アイスロード——前ガ辻

——シユラインロード——唐櫃——神戸電鉄六甲登山口



六甲山のうちで、最も古くから登山者に親しまれているのが西六甲である。表六甲ドライブウェイや、ケーブルカーがついているこの方面は、六甲の表玄関ともいうべきところであり、登るにしてもなにかにつけ大変便利などころとなっており、多くの一般登山者から親しまれているところである。

さて、このコースは、アイスロードを登り、シユラインロードを下ることになるが、出発点は阪急六甲駅である。ここから、六甲ケーブル下まではバスに乗るとよい。ケーブル土橋駅から右へ折れると油コブシへと道が続くが、アイスロードを歩くには左へ折れてしばらくドライブウェイを歩いて行く。

アイスロードという名の由来をたずねてみると、その昔、まだ人造氷のなかった明治時代に、冬の季節に六甲山頂の池に張りつめた天然氷を氷室に保存しておいて、夏になってから手押し車などに積んで、神戸市内まで運搬したところから名づけられたといわれている。今の時代からみると悠長といおうか、実にのんびりとしていたものである。さらにのんびりとしていた話になるが、昔は、外国人や金持ち連中が、六甲山上の別荘やゴルフ場への行き帰りにこの道を駕籠で通ったという話も伝えられている。変われば変わるものである。実際に歩いてみると、草いきれはムンムンするし、道は細いし、昔日のおもかけはまるでない。

アイスロードという名称の由来を知って歩いているから、何か歴史的な道を歩いている感じになるだけであって、そういうことを知らなければ、まったく何の変哲も



ここからアイスロードに入って行く

ない、ただの山道である。余り由来にこだわっているとかえってガツカリするものである。目の前に展開する新緑の洪水を思う存分楽しむことにしよう。前日の雨のため、地面や道の両側の下草が湿っていて、いささか歩きにくい。

細い山道を登りつめてアイスロードの切れるところが前ガ辻で、ドライブウェイに出る。全担ハウスなんかがあつて、ここからドライブウェイをまたいで、シユラインロードへと入る。

あちこちに点在する会社の山荘を横目にみながら、広い道をしばらく歩く。途中、幹がビッシリとこけでおおわれた杉のちよつとした林がある。やがて行者堂に出



行者堂からの素晴らしい眺望

る。このシュラインロードという名の由来は、途中にこの行者堂があるので、外国人がシュラインロード（聖なる道）と呼んだのでつけられたということである。この行者堂で昼食とする。

この行者堂は役の行者を嗣っており、役の行者の子孫で唐櫃道を開いたと伝えられている四鬼七兵衛夫婦の石像（開祖大士脇侍両鬼尊像）が安置されている。伝説によると、その昔、唐櫃道を夜に越えようとすると妖怪が出たり、怪しげなことに会おうので、やむをえずに夜道を歩かなければならない者は、四鬼家から火縄をもらい、それによって怪異を追い払って、山越えの安全を期したといわれている。

あたりは、ときおりうぐいすの啼声がかきこえるだけシーンと静まりかえっており、伝説のことを想い浮かべていると、ふと、無気味になってしまう。突然の物音にハッとすると、ムササビらしき影が谷間に消えた。

行者堂からの眺めは、手前に裏六甲ドライブウェイが、そして、遙か彼方に六甲最高峰の米軍のパラボラア



東六甲からのシュラインロード入口



不気味な(開祖大士脇侍両鬼尊像)

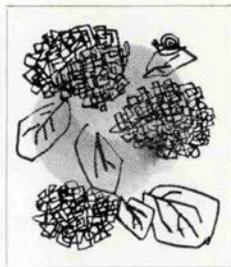
ンテナを望むことができる。

ここから道は、それまでとは違って変わった細い急な下りとなるが、一気に下りて行くことにする。最近、余りひとが歩かないのか、時々、クモの巣が顔にひっかかりたりする。途中で樹齢何百年とも思われる杉の大木の幹に出くわした。けつとばしてみるとボンボンと虚ろに響き、空洞になっているようであった。やがて、ドライブウェイにぶつかる。ドライブウェイをトボトボと歩いて、二の橋付近から脇道を歩くことにした。この道の出口が、東六甲からのシュラインロードへの入り口となるのであるが、どういうわけかそのあたりはゴミの山と化している。話をきけば、大分前からゴミ捨て場がわりになっているらしく、まったく何とかならないものかと思う。やがて、人家がチラホラ見え出し、唐櫃へ到る。丁度、田植えの時期で、満々と水を張った田圃のどこからゲロゲロと蛙の声がかきこえたり、青蛙がピョンと道路へ飛び出してきた。

このコースは、アイスロード、シュラインロードという歴史的な由来のある道を歩いたわけであるが、残念ながら、その意味では期待したほどではなかった。ただ、このコースは、これといった難所もないので、一般向きではあろう。終着点の神戸電鉄六甲登山口駅のすぐ後には、多聞寺があるので、寄られるのもいいと思う。

## ★六甲山を歩く

## 谷歩きと尾根歩きを楽しむコース



コース 7  
 布引——市ガ原——トエンティクロス——徳川道——ドライブウエ  
 イ——ダイヤモンドポイント——地獄谷西尾根——大池

布引にある新神戸駅で画家の松岡寛一先生と待合せていたが、このコースは距離が長いということで、市ガ原の入口までタクシーを利用。市ガ原の奥にある桜茶屋を通り、杉の木の下の囲い井戸をみると、この日（六月四日）は水が枯れていた。市ガ原の谷水は人出が多いため汚れているので飲まない方がよいのだが、この井戸が枯れているとなると、水は新神戸駅でつめていかれた方が確かだろう。

桜茶屋から十五分ほどで、滝のように水があふれ落ち



トエンティクロスから徳川道へ入ると、この沢最奥の八州嶺ダムがある。山道は丸木橋を渡り、このダムの右岸を高まく（スケッチ/松岡寛一）



満開の小アジサイの花がきれい

徳川道に入るとすぐに大きなダムにぶつかるとある。八州嶺ダムである。徳川道の名はよく知られているが、その由来に気をとめる人は案外少ないようである。幕末の慶応三年に大名の参勤交代の道としてつくられたので「徳川道」と呼ばれるようになったのである

ているダムにつき、広い川原に出てくる。川原には、白ペンキで書かれたトエンティクロスの道標が立っている。道標によると「地蔵谷の出会いから徳川道の出合いまでの間を言います。かつて、この布引谷の溪流を右に左に飛石づたいに二十回渡ったのでこの名がついたが：」とあり二キロほどの谷道で、渓谷美が楽しめる。初夏の今頃は、木々の新緑が美しく、小アジサイの花や山ボウシの白い花々が満開で、歌や口笛を口ずさんでみたくなる。たらの木の新芽が出ており、松岡先生が「これは食べると美味ですよ」と教えて下さった。

溪流を右、左へと渡りながらさかのぼると、ダムがみえてくる。ダムの上端に出てまた溪流を何回か渡ったところ広くひらけた川原に出る。ここで小休憩をとり、清流で顔を洗うと冷たくて気持ちがいい。ここは三方面から谷がはいりこんでいる感じで、左手の谷の入口に、森林植物園への大きな案内図板がみえる。トエンティクロスはここで終わり、おなじ布引谷であるが、道の名称は徳川道と改まる。



山の救急箱（写真右）とその中味（写真左）花はたけの会の人々が善意で設置している

が、なぜこのような谷間にくられたのであろうか。幕末、横浜で生麦事件が起り、幕府では外国人の多い港町神戸での事件の再発を防ぐため、神戸を通らずに迂回して西国へ出る道―徳川道―をつくったわけである。しかしこの新道は、竣工するかしないかに徳川氏が大政を奉還し、明治維新となったので、実際には大名行列は通っていないわけである。もし、この道が利用されていたら行列は大変な迂回をするわけで、当時としては腹立たしい道となったのではないだろうか。しかし、ハイキングコースとしての徳川道は、落葉のある静かな道で、小鳥の声と谷川のせせらぎを聞きながら行くムードいっぱいのところである。八州嶺ダムから三十分ほど歩くと、桜谷道との出合いに出る。

この出合いで、写真にみるような赤十字の箱をみつけたので、開けてみると救急用品が入っていた。マキキュロ液やホウタイ、針や糸など山で思わぬ事故に会った時、助かるものばかりである。松岡先生は昨年八月にこの救急箱の補充点検をしているグループにスイカをごちそうになったとか。この奉仕グループは花はたけの会といい、小垂恒夫さん（伊丹市中野赤塚一―九番地）を中心に活躍している。明るくさわやかな話題にぶつかり、最近の山の水の汚れ方への不満が少しうすらぐ。

右手に桜谷をみながら「徳川道を経て六甲」とある道標に従って四十分程歩くと「右摩耶、左六甲」の道標にぶつかり、徳川道は終りとなる。ここから六甲縦走路の

一部を通過して六甲ユースセンター前のドライブウェイへと出て、西六甲へと向う。市バス丁字ガ辻の停留所を通りすぎるとすぐ「左、ダイヤモンドポイント」の道標があり二十分程でつく予定が、最初の分れ道で迷って時間を取ってしまった。会社の山荘の案内板はあるのだが、ダイヤモンドポイントへの道標がなく困ったのである。この分れ道を左に行くのだが、ここはぜひ道標をつけてほしいところだ。絶景のダイヤモンドポイントで小休憩後、地獄谷西尾根筋を、水晶山を越えて下っていく。地獄谷の名の通り、大きくて深い谷で、わき道はあるが、鉄線がひかれており、それにそって下れば迷うことはない。やがて大きなダムがあり、神港高校大池グラウンドを左手にみて歩いていくと住宅地帯に出て、神戸電鉄大池駅でこのコースは終りとなる。距離は最初心配したほど長くはなく、一般向きとしておすすめしたい。



ダイヤモンドポイントから辿る地獄谷西尾根の最初のピーク水晶山（708.6メートル）  
こしに北西の山なみがひろがる（スケッチ/松岡寛一）